宮古島における「神の相位とその所在性について」

―神性とは何か、―

自然と神についての規定

博物館協議会委員　岡　本　恵　昭

神とは、自然崇拝を通し、尊厳なる神秘性と崇高なる個性を持ち、自在に應変して大いなる精霊を通して人間と関わりを持つもの・信仰・信心・願心・回向（えこう）など、つまり、自然の力と、人間の内在する苦しい時の祈願にかける対象である。結局、神とは崇高なる存在である。

1.神の位相とは何かーどこに居るのか

（相位とは位置のこと）

神はこの島では、いづこに居ますや、その存在と観念、常在する神々への祈願の対象として、神の存在ーありよう、ある場所（聖地）・御嶽のイビ＝島では「座敷」（ザシキ）にあたる場所そのものを神の住み家と伝える。いわゆる（神のざしき）＝（シマ）という空間を稱す。

シマ・スマとは宮古島のことである。本来・島（シマ・スマ）の神は、多種多神の自然神の姿をもって人格神的、幻想的な存在である。（常在神）万有に等しくて存在する精霊と霊性を崇拝信仰する状態にあるといえ、魂を確知する。自然宗教の中に聖なるものを通して存在するそのものを祭り祈願の対象とする「神々」なのである。

御嶽の神は常在神なのだ。常に神々がいつく場所は定まって離れない。佛教以前の聖性の魂が、島の人々の宗教を神観念に向かっていることを考えなければならないが結論として自然宗教・原始宗教のそれは、文化的である佛教の儀式や教えには元来この島にはその基層文化も信念も観察することが不可能である。すべて島の自然信仰（マナ）以前は、島の儀礼の源点に入り込めないものがあった。とにかく、自然宗教（原始宗教ーアニミズム）を含むもの、又はシャーマニズムと、佛教の聖性儀礼と佛（ホトケ）への回向（信仰）の二面性が変容して分離したものである。

（聖とケガレ）これらのことを今、結論づける学術的確証はないが、多くの人は、今日の多文化雑居の中でシマの文化を取り戻したい自然宗教の回帰こそ重要である。それは、そうした沖縄の「アイデンティティ（主体性）」探求なのである。それはかつて島の人々が万物の天地自然のおそれと宗教の念をもう一度見直すことで、シマ人のあり方、存在の位置を発見することにある。その意味で宗教研究の中のシャーマニズムや、アニミズム、神観念や他界観念が注目をあびていくのではないだろうか。怪談・妖怪・変態文化ブームなどは、日本人の心の基層にとどまる信仰のゆがみを表現しているものの、今日の合理化社会の欠けたる姿であります。真の宗教現象は多文化のはやりの中にあるものを、もっと

自己解明に依って自由にその主体性＝アイデンティティを主張するものではないでしょうか。日本人のこころ－文化の位置－「神と私の位相について」考えを為すべきものと考えるものではないでしょうか？具体的には伝承を信仰することでしょうか。

＊注（ハレ＝晴れ、めでたいこと、祝事、浄や聖のこと）
（ケガレ＝不浄、気が枯れて病になる。ハレへの転展）
注　合理性とは、今時代の進展の方向づけで経済第一主義社会のことを言う。

2.神の位相と神の位置－存在観念について－

島の神々は、その神々が必ず独自の神話（神々の出自（由来）を伝承）を持ち、それぞれが存在する意味内容を持参所有しており神の依憑、それぞれの場所（イビ・ウタキ）にかわるものである。島には自然の森が杜となって、その空間すべてをイビ（威部）と呼ぶのです。これら聖なるもの自体イビは（石や木や祭殿の香炉などがあり、祭祀堂（ムトウ）神の家・石碑・墓石・立石・臣石　鏡、井戸の如きもの即ち、神の寄りつく場所）である。このように常在神も渡来する神々も依憑（ヨリシマシ）、いつき（斉く）祭られる場所に座しているのです。以上「御神体」のことを云っているのです。

3.常在神について－「神のよりしま」とは－

観念の上では、「天の七座」「十二支方の方位の神」「天の神」「地上の神」と選定された神々が居る。相対する、観念上の位置と現存在するあるものとしての、見えるもの、語りかけられるものとして、平常の魂で、目に観える「もの」、観念上の対象を結びつけた「もの」がある。相対性とは、こうした二元性を云う。相位とは神々と聖性の分離・相反にあると考えてもよいだろう。従って双分制と云う。

祖先神一祖霊について、位牌、墓、骨ツボ、精霊魂等について知識を多くする。霊魂に関係して観る場合やはりこの対座の二つが存在する。これらを相対的に神「カン」ととらえるのである。「神」と「ほとけ」のことばは異なるが、死者霊についての観念には未分化である。

霊魂はつねに対象的に石ころや土・砂・岩の先端（頭上に巻かれた「つる草の八巻」（かうす）・（フサ）とも呼ばれるのに取り付くかけら被物（かぶり物）に依り付く・スピリットであり精霊でもあると云われている。

（例＝入魂式・脱魂式）＝まぶいくみ、たましうかび、まぶい入れ、まぶいうくみ

4.所だめ・ヤフバライ＝
まぶいはなし、払い願い、神人ばかーり→祈とう、払い願い崇りを払う
＊七天の座標軸（ナナウテン）、（龍宮七座）について

神々の相位と位置ーナカビ（中日・現存在）を中心にしてどこに神々が常任しているのか一例を挙げることにしてみよう。

5.龍宮座の神の所在　龍宮信仰と海上他界について

海上他界と地底他界の思想ー地底と海底（ニツジマ・ミニー・ニーラ・フカウミ）の明るい他界。ニツシヤ（ニライ・カナイ）は宮古島では無限定である。
（自然と人工物を含めて）＝たとえば御宮・神社・祀・祭殿・拝する場所を云う。

6.御嶽の神々ーその出目と神話について

神が祭祀の対象となる多くの役目が、神によられ人間的な発想である。
神の出目（出現）については、歴史上の記録を述べる述記説明する。
創生神　男女神　夫婦神　英雄神　里の神、水の神、家の神、海辺や岩々に宿る神、航海安全の神、祖先神、マウの神（マウガン）辻の神・個人の守護神（神羽）双紙の守神＝「火の神」元は「里の神」「メクルの神」がある。

7.創生神ー島つくり、人つくり、作物の創生について

御嶽の由来
御嶽の由来や出目については、伝承記録に依るものがある。「歴史的伝承」と「由来記」・「縁起的な物語」が発生し、神々の出現それらの個性ある役割は常に共同体的な神々である。ここに御嶽は発生する。井戸や社、岩や、洞窟（ガマ）にもシマの神々が配置されている。個性のあ神は出現［常在神］に祭り上げられる。
①常在する神々（創生神らも含む）・・・それらは
　共同体の神々　家の神々　個人的なレベルとしたマウ神
②来訪神の神々　祖神　パーントウ　ウヤガム（祖神）
③創生される神々と消えゆく神々と伝承については、認知されず忘却される神々の行く末はどう考えるか。

＊双分利と３分離（三つの分離空間　三分制）の方法論について
ー社会人類学の文化変容を知る　分類と構造ー
筆者は常に、宮古島のシャーマニズムについては「三分制という」
※結論的に結ぶもの
＜重要＞社会構造や村落形態の性格上から「分類」してきたのである。視点を考えると構造的に三つに分け、共同体からー／家単←位ー／個人そのものとして神観念を「地域の中にあって」祭祀祈願の中にあって考察する一つの方法である。このような考察が最も良い理解が得られるものと考えている。従って、方法論を変えて、三分化した構造の手段で「社会と人」の関わりを観察すれば良いと考えていた。

三分制の方法を用いて、狩俣村の織りなす村落と神々の分別、分類を見事にやってのけたのは、本永清氏の論文である。共同体志向の祭祀構造ーテン・根の島・ウイカ天・イーヌウタキ・カンヌイビ・イビヌ香炉・ムトゥヤー・カンヌヤー・カー（水の神）ー、前の屋という空間と威部（イビ）此の中に厳格に区分されたる村落の家々を今の世、すなわちンナマヌユゥ（現世）、ミャーク（宮古）・(中の島)、と呼称する。そして対向する南の嶺にある洞窟墓地群、墓地周辺を「パイヌスマ」(南の島)、ニッジャカニドヌ（ニツジャ金殿）ネリヤカンドヌ（根屋）　ネイヤー（地底・海底＝龍宮、他界のこと）と呼ばれ、不浄の葬地、他界であると呼稱している。この方法は、池間島にも、大神島に於いても成立する。聖地空間と不浄の空間には厳格なる空間と時間の差別がある。テンヤウイヤ（天上）この島村（スマ）＝ナカビ、中日ミャーク世、後世の死者の霊魂の集まる根島「ネシマ」（グソウー神の島に対する根の島）「ニツジャ金殿」（地底・他界の浄土の番人）鉄の門からなる他界空間も明確になってくる。共同体の神とシャーマン＝ツカサ、サス家、屋敷・家族、此の世、現世のニャーク世の神屋敷及び周辺の神ーミャークのジヤマン＝カンカカリャ、ユタ、ヤーザス、サスなどのレベルがいる。不浄、死のケガレ、先祖のマウ神の霊的交渉、あらゆる祟り、不幸、病因、災害の方、息災の部分、人間一人一人との生涯にわたる死者霊との関わり①「カンカカリャ」②「サスンマ」③「ツカサンマ」「トマンマ」も、共同体の神のセジと正反対にある。系譜的な霊との依憑「ポゼッション」又は、昔は「エクスタシー（法悦）の技術」と個性的な巫女（ユタ）の持つ唯一の召命霊型のマウと（辻）の主の神秘的な交流がある。依って分けられ、スンガン（死神）カカリャ＝グショウザス、ユタ、ブソーズ（不浄専門）のトキ（日取り）、ムヌス（物識り）達がいる。総して、宮古島のユタは、この方面で霊性を顕わし、ユタの云う判事とそれに依る祈願を求める。

今日では、因果関係の補修であるこの現象は本質的に変わっていない「儀式」は略される創唱宗教である佛教と外来宗教の一つで、歴史が長く国王の努の中で儀礼を行っていたと云う。ユタやカンカカリャーには、神道や道教的な要素はない。儀礼として「焼紙」（うちかび）を用いたりして完了するわけです。一方ではユタの行う祈願には、古来よりの呪符や民間信仰での呪的儀礼はもともと無いのである。これは後に、その専門を極めた「易書」による時、三世相の持つ能力であると考えられる。この広がりは、宮古島独自の宗教儀礼の文化相があって時代を共に進化したものであろうと考えられるものである。

＊宮古島のシャーマンの一つである、ユタやカンカカリャー（神懸る）には、独自マウ神（マウ信仰を中心にした儀礼と行為）がある。生涯にわたり個人と関係して存在と死と共にマウ神は捨てられる。

＊マウ神を抱く宿命と神ダーリ（カンツキャギ（巫病））の中で神に追われ、精神的不安を顕わす。これは古い形式で「神ダーリ」の程度が高い人にみられる。

＊ユタや神がかりの人は、マウ神の指示による指導をうける。マウ神を離れてカンカカリャーのツヅの高さや、評価の大小について比較規定は不可能と思われる重要なものがここにある。

・マウ神は香炉一個に存在し、マウを受けた人には、このマウの香炉があって信仰の対象物となる。マウ神はマウ神をうけた人にのみ限定されて機能すると云う。ツヅ降りすると云う。この信仰は宮古島のすべてにみられる。

・マウ神は普段は守護神である。カンカカリャーのマウ神は、人助けのための判事（ハンジ）や神のことば（フツ）を聞く。したがってカンカカリャのフツはマウ神の働きで本人（ユタ）の口を通して口に出したり身体で示したりする。
いつも一人踊的存在にあるとき、神がとりつき（声）を出す。神グイ（神声）フチフツのことであろう。